

日本経済新聞

がんの転移にも一定の効果 進化続ける放射線治療



がんは細胞の老化といえる病気です。加齢とともに遺伝子にキズが積み重なり、日々多数のがん細胞が生じます。体には免疫細胞ががん細胞を退治する防御システムがあり、免疫監視機構と呼ばれます。ただ、免疫の働きも老化によって衰えるため、年齢が上昇するとがんが増えます。

がんは数十年単位の年月をかけて診断可能な大きさになります。大きくなるにつれ、がん病巣の中央付近には酸素や栄養が行き渡らなくなり、環境が悪化します。

がん細胞にとって、環境の悪化は転移促進の原動力となります。転移に必要な遺伝子変異を持った細胞だけが新天地で増殖できるのです。これは自然淘汰による進化の過程にそっくりです。また、同じ細胞の数でも、小さなサイズになって全身に散らばった方が、がんにとって環境が好転するのです。

全身に転移したステージ 4 において、主力の治療法は抗がん剤をはじめとする全身療法です。最近では発がんの原因となる遺伝子に作用する分子標的薬や「オプジーボ」に代表される免疫チェックポイント阻害剤により、多数の転移があっても長期生存が可能になってきました。脳転移がある肺がん患者が、5 年以上元気に生活することも決して珍しくありません。

がんの遠隔転移で、転移の数が 5 個以内の場合は「オリゴ転移」と呼ばれます。オリゴ転移に対し、大量の放射線を集中させる定位放射線治療をピンポイントで実施することで、生存期間が延長するというデータが出ており、保険でも認められています。

日本人男性に一番多い前立腺がんの場合、転移があっても原発の前立腺に放射線治療を行うことがあります。米国のバイデン前大統領は 2025 年 5 月、骨転移を伴う進行した前立腺がんであることを公表しました。がんの悪性度を示すグリーンスコアも高いハイリスクタイプです。しかし、ホルモン治療によって骨転移が大幅に縮小したため、前立腺への放射線治療を受けています。その後の経過も悪くないようです。

私は 40 年以上がん治療に携わってきました。かつて転移が見つかると「余命半年」などと宣告していたものです。しかし今、転移に対する考え方は大きく変わりました。

従来は転移があると薬物による全身療法しか選択肢がなく、手術や放射線治療といった局所療法に出る幕はないとみなされていました。今や、転移があっても一定の条件下では放射線治療が有効であると分かっています。

加えて、放射線治療によって、照射していない転移も消える「アブスコパル効果」も期待できます。機会を改めて紹介したいテーマの一つです。

2026 年 2 月 4 日